

# 「程度進行」の意味をもつ複合動詞「V1+こむ」 の意味と構造に関する考察<sup>1</sup>

睦 俊秀 (モクジュンス)  
(東京外国語大学大学院博士後期課程)

## 要 旨

日本語の複合動詞「V1+こむ」の意味について、姫野 (1978, 1999)、松田 (2004)、松本 (2009) などの従来の研究では、複合動詞の構成要素の1つである「こむ」の意味に基づいて「内部移動」と「程度進行」とに2分類し、考察を行っている。2つの意味のうち、「内部移動」を表す「V1+こむ」の意味と構造については、様々な観点から研究がなされているが、「程度進行」を表す「V1+こむ」の場合、先行研究のうち、最も積極的に「V1+こむ」の意味記述について論じている姫野 (1999) でさえ、意味だけ大雑把に確認することに留まっており、十分に検討されていないように思われる。

本稿では、国立国語研究所の『現代日本語書き言葉均衡コーパス』(2009年度モニター公開版)を用いて上記の2つの意味のうち、これまであまり議論されていない「程度進行」を表す「V1+こむ」に焦点をあてて考察を行った。考察方法として、V1と「V1+こむ」との意味・構文構造を比較し、V1とは異なる「V1+こむ」の意味だけではなく、形態的・構文的な特徴を明らかにすることを試みた。その結果、これまで大まかに「程度進行」として分類されてきた「V1+こむ」が、単にV1の意味の「程度進行」という意味だけではなく、V1との関わりを持ちながらも、ひとまとまりの単語としてV1や「こむ」とは異なる意味・構文的な特徴を持つことが確認できた。

## 1. はじめに

### 1.1. 研究目的

日本語の複合動詞「前項動詞の連体形 (以下、V1)+こむ」に関する従来の研究では、「V1+こむ」をその意味により、次の2つのグループに分け、考察を行っている。

- (1) a. 内部移動の意味を表す「V1+こむ」… 駆けこむ, 持ちこむ, 等
- b. 程度進行の意味を表す「V1+こむ」… 思いこむ, (何回も) 走りこむ, 等

<sup>1</sup> 本稿は2011年1月に東京外国語大学大学院総合国際学研究科に提出した執筆者の修士論文『現代日本語における複合動詞「V1+こむ」について—意味とその構文構造を中心に—』の一部を書き改めたものである。

aの「駆けこむ」や「持ちこむ」などは、従来の研究で「こむ」の「内部移動もしくは移動性」という意味に基づいて様々な研究がなされている。一方、bの「思いこむ、(何回も)走りこむ」などの「V1+こむ」は、「程度進行」と言われているものの、V1と後項動詞(以下、V2)がいかなる関係であるかが明確ではないため、その実態について述べられている研究はそれほど多くない。

本稿では、先行研究でいうところの「程度進行」という意味を一旦認めた上で、その意味を持つ「V1+こむ」に如何なるものであるのかを大型コーパスを使用して確認し、实例に基づいて「V1+こむ」の意味の实体や形態的・構文的特徴を明らかにすることを目指す。

## 1.2. 先行研究

複合動詞「V1+こむ」をテーマにした研究として、姫野(1978)、松田(2004)、影山(1993)、松本(2009)<sup>2</sup>が挙げられる。それぞれ異なる研究背景に基づいて分析を行っているため、研究ごとに若干の違いが見られるが、本稿で扱っている「程度進行」を表す「V1+こむ」については、共通した部分が見られる。

まず、姫野(1999)では、複合動詞「～こむ」<sup>3</sup>の意味を「内部移動」と「程度進行」の2つに分けた上で、複合動詞「V1+こむ」を移動先の違い(内部移動の場合)と程度の種類(程度進行の場合)との意味的な側面によって、(2)のように下位分類している。

### (2) 姫野(1999)の複合動詞「～こむ」の意味分類

#### ・内部移動(移動先による分類)

閉じた空間への移動(持ち込む、等)、固体への移動(植え込む、等)、流動体への移動(溶け込む、等)、集合体・組織体への移動(混ぜ込む、等)、動く取り囲み体への移動(巻き込む、等)、自己の内部への移動(かがみ込む、等)

#### ・程度進行(進行内容による分類)

固着化(寝込む、黙り込む、沈み込む、思い込む、考え込む、等)、濃密化(老け込む、冷え込む、咳き込む、だまし込む、座り込む、等)、累積化(使い込む、読み込む、漬け込む、書き込む、投げ込む、等)

このような姫野の分類は、主に意味特徴について述べられており、構文的な特徴については詳しく扱っていないため<sup>4</sup>、2分類の基準が何かについて、まず疑問が残る。姫野では「V1+こむ」の意味によって複合動詞「～こむ」を分類していると言っているものの、実際に、分類基準としているのは後項動詞である「こむ」の意味、すなわち、内部移動と程度進行という意味である。(姫野1999: 60)。また、様々なV1が「こむ」と結合する際、如何なる理由でその2つの意味の中で一方だけが現れてくるのかを考察すべきであるが、

<sup>2</sup>松本(2009)では、主に「内部移動」の意味を持つ「V1+こむ」について扱っているため、本稿では詳細を割愛した。

<sup>3</sup>姫野(1999)の表記。本稿では「V1+こむ」と表記する。

<sup>4</sup>しかし、分類の結果から見ると、内部移動を表す「V1+こむ」はその構文に二格を含むもので、程度進行の意味をもつものは二格を含まないものとして分けられると考えられる。

姫野では研究されていない。つまり、姫野の分類は、様々な「V1+こむ」の意味から帰納的に2つの意味を把握したのではなく、最初から「こむ」の2つ意味に基づいて「V1+こむ」をグループ化したものに過ぎないと思われる。

また、姫野の分類方法に賛成できるとしても、「程度進行」に属する様々な「V1+こむ」を固着化、濃密化、累積化という意味に分類できるかどうかという問題も残る。動詞の意味からみると、固着化にも、濃密化にも、累積化にもなる場合も十分あり得る。例えば、「漬け込む」は、姫野（1999）では累積化を表す動詞として分類しているが、下記の（3）から考えてみると、前項動詞の繰り返しの行動というよりは、前項動詞の状態が続いているという意味、すなわち固着化に近い意味と考えられる。

（3）餅米の飯を少量と食用菊を乗せ、中央に赤トウガラシの輪切りをあしらって、桶に漬けこむ<sup>6</sup>。

（すしの事典）

固着というのは、累積や濃密とは関連が深い意味であるため（累積した結果、固着するなど）、「V1+こむ」と共起するほかの文の要素（副詞など）や文全体の意味により、固着か濃密かというゆれが生じやすい。したがって、「ある動詞は固着であり、ある動詞は累積である」という分類方法は、問題があると考えられる。

以上のことをまとめると、姫野の研究は、「内部移動」と「程度進行」という「～こむ」の意味分類、さらに「程度進行」の意味の曖昧性などにおいてその妥当性が問われる。

次に、松田（2004）は、認知意味論に基づき、「～こむ」の意味構造を検討している。ここでは、まず「こむ」の認知スキーマ（焦点化移動）から「[～こむ]のコア図式」を設定している。

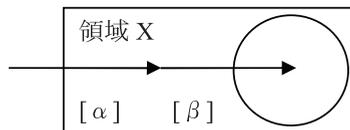


図1 松田（2004: 75）の「～こむ」のコア図式

<sup>5</sup> 姫野（1999）では、「累積化」について、以下のように説明している。

「このグループの前項動詞は、繰り返しのきく、人間の意志的行為を表している。「こむ」は、時間をかけてその行為を重ね（累積し）、人の技や対象とする事柄の質を向上させるといったものである。」（姫野 1999: 72）

<sup>6</sup> 本稿では考察の対象とする「V1+こむ」を下線、それに対する連体修飾語（副詞）を波線、状況語を点線、一部の二格名詞を囲み線、その他の強調の必要性がある部分を二重下線でそれぞれ示す。

<sup>7</sup> コア図式

「Langacker, 田中, 国広, Dewell は、多義的語義全体を包含するような共通の図式を想定する。この共通図式を Langacker は「超スキーマ」、田中は「コア図式」、国広は「現象素」と呼んでいる。（中略）共通図式論を唱える研究者は、一つの言語形式で表される多義的語義は、理論的には共通の意味に到着できるはずであると言う前提に立って、多義的語義をすべて包含するような上位概念であるスキーマを想定する。ここではスキーマは成員すべてに当てはまる共通項を表現するものであり、ここの成員の共通性を具現する総合体として考えられている。」（田中 1997: 88-90）（松田 2004: 66-68 再引用）

松田（2004）は「～こむ」の意味タイプを V1 と V2 の意味関係に着目し、次の表 1 のように 4 タイプに分類している。

表 1 松田（2004: 76（表 3-1））の「～こむ」の用法の分類

二格を伴う「～こむ」		二格を伴わない「～こむ」	
A タイプ	B タイプ	C タイプ	D タイプ
V1 は「内部移動」を含意しない	V1 自体が「内部移動」を含意する	V1 が示す状態への変化とその状態への固着	V1 の反復行為により生じる状態変化（目標に向けて）
飛び込む 呼び込む	入り込む 植え込む	ひえこむ 眠り込む	十分に走り込む

さらに、上記の各意味タイプが、図 1 のコア図式の「～こむ」の意味的イメージ [α] と [β] のうち、どちらに焦点化されるかを、下記の図 2 のように図式化している。

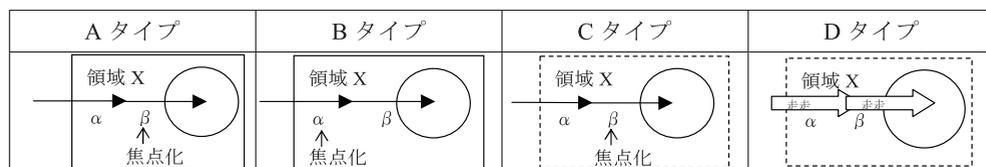


図 2 松田（2004: 80-87）のタイプ別の「～こむ」のコア図式

松田（2004）の分類は、姫野（1999）が様々な「V1+こむ」を意味に基づいて 2 分類したのとは異なり、V1 と V2 の意味関係により、「V1+こむ」が二格名詞を伴っているか否かという形式的な特徴に基づいて「V1+こむ」の意味分類を行っている（表 1）。しかし、松田は「V1+こむ」の V1 と「こむ」との意味関係を認識しているにも関わらず、V1 の格（意味）以外、他の構文的な特徴に関する考察は殆ど行っていない<sup>8</sup>。さらに、各意味タイプを「～こむ」の意味的イメージに当てはめて考察を行ったため、結果的には姫野と同様に「こむ」の 2 つの意味に基づいた分析に留まっている。

最後に、影山（1993）では、一般的な複合動詞を語形成における「他動詞調和の原則<sup>9</sup>」に従って説明しているが、例外的に「V1+こむ」は、次の（4）のような特徴を持っているため、他動詞調和の原則に当てはまらないと述べている。

<sup>8</sup> 一部の「V1+こむ」に対して分析を行っているが、動詞ごとの個別的な説明に留まっている。

<sup>9</sup> 「動詞+動詞の複合において、同じタイプの項構造を持つ動詞どうしが複合される」（影山 1999: 201）

(4) 影山 (1993) で指摘している「こむ」の注目すべき特徴

1. 「こむ」という動詞自体の形態と機能（自立語「込む」と複合動詞とは拘束形態が異なる）
2. V1の項関係を保持しながら二格を付け加えるという働きを持つ。
3. 「こむ」があらゆるタイプのV1と結合する。

影山は(4)に述べた理由から、「V1+こむ」を語彙概念構造で説明すべきであると主張しているが、すべての複合動詞「-こむ」を語彙概念構造から説明できるわけではない。影山は「流し込む」「飛び込む」などは方向性（本稿でいう「内部移動」）の語彙概念構造<sup>10</sup>で説明しているが、「思い込む」や「冷え込む」などはメタファーに繋がるもの、補文構造を要求するものであるため、語彙概念構造では説明できないと述べる。つまり、動詞によって異なった説明方法を取っている。しかし、このような影山(1993)の「V1+こむ」に対する考えを用いて、実際の「V1+こむ」を説明しようとする、説明に無理がある場合が多い。例えば、影山(1993)は「植え込む」を方向性をもつ「V1+こむ」と判断し、語彙概念構造を通して説明している。その際、「植える」にも、「こむ」にも場所の意味概念があり、その意味概念が重複することから、「単純な「植える」を強調したような意味合いになる」(影山1993: 131)と述べている。しかし、場所の意味概念が重複するとはいえ、それが強調の意味になるとは限らない。また、必ず「植え込む」の「こむ」が方向性の意味を持つとも言にくい。いずれにしても、影山の方法からは、「V1+こむ」の性質の全てを説明することは難しいと考えられる。

以上、「V1+こむ」に関する先行研究の流れを確かめたが、その殆どが後項動詞である「こむ」の語彙的な意味に基づいた分析になっている。しかし、もはや現代語の「こむ」の意味は、明確に2つの意味を保持しているとは言えない。そのため、「こむ」の意味に基づいて現代日本語の「V1+こむ」の意味を究明するという出発点に問題があると考えられる。

さらに、「こむ」の意味が分かったとしても、V1と「こむ」の意味の総和が「V1+こむ」の意味になるとは限らない。すなわち、要素の意味の総和が必ず単語の意味になるとは言えない。それにもかかわらず、従来の研究ではV2である「こむ」の意味だけに焦点をあてて考察を行っている。本稿は、このような形態素中心の先行研究から離れ、いわゆる「程度進行」の意味を持つ「V1+こむ」の意味的・構文的特徴について詳しく記述することで、様々な「V1+こむ」が持つ特徴を明らかにすることを試みる。

### 1.3. 研究方法

以上の先行研究の問題点を踏まえ、本稿では、「程度進行」を表すと考えられる「V1+こむ」を研究対象とし、その形態論的・構文論的な特徴について考察することを試みる。本稿では、その方法として、大量のコーパスを使って取り出した事例に基づいた、実証的

<sup>10</sup> 影山(1993)によると、「こむ」は次のような語彙概念構造を持つ。  
[込む]: [Event BECOME [y BE IN z]] (影山1993: 129)

な研究を目指している。まず、研究対象になる「程度進行」を表す「V1+こむ」の選定は、次のような手順に従って行う。

(5) 本稿の研究対象になる「程度進行」を表す「V1+こむ」の選定の手順

- ①調査データである『現代日本語書き言葉均衡コーパス (BCCWJ)』(2009年 DVD モニター公開版) から現代日本語としての使用語彙だと考えられる複合動詞「V1+こむ」を取り出した<sup>11</sup>。  
・異なり語数：計 182 語／検索件数：約 2 万件 (例)
- ②用例、辞書、関連する研究 (奥田 (1968-1972)・工藤 (1995)・早津 (2009)) を参考にし、「V1+こむ」とその V1 の構文構造を想定した。
- ③「V1+こむ」と V1 との構文構造を比較し、違いが見られる場合を「内部移動」の意味を持つ場合とし、違いが見られない場合を「程度進行」の意味を持つ場合と判断した。

上記の手順によって、本稿の研究対象の「V1+こむ」の異なり語数は、計 102 語で、考察した用例数は 5066 例である。上記の (5) の手順の③で V1 と「V1+こむ」の違いから、研究対象を選択した過程は次のようである。「V1+こむ」と V1 との構文構造に違いが見られる場合は、二格名詞を伴わない V1 が「V1+こむ」になると、二格名詞を伴うことになる場合であった (例えば、【Nガ《もの》ヲ 持つ】⇒【Nガ《もの》ヲ 《空間》ニ もちこむ】)。一方、違いが見られない場合は、V1 と「V1+こむ」のいずれも二格名詞を伴うか、いずれも二格名詞を伴わない場合であった (例えば、【《人》ガ 寝る】⇒【《人》ガ ねこむ】/【Nガ《もの》ニ 座る】⇒【Nガ《もの》ニ すわりこむ】)。この点から見ると、2.2 で述べた松田 (2004) の意味タイプ B, C, D (表 1) に属すると思われる「V1+こむ」が本稿の研究対象である。

## 2. 本論

### 2.1. 「程度進行」を表す「V1+こむ」の種々

先述した、1.3 の手順に沿って「V1+こむ」の構文構造を考察したところ、同じ類型を持っている動詞ごとに分類した結果が下記の表 3 である。分類の際、動詞とその動詞の構文の中に使われた名詞の語彙的な意味が、構文構造の中で如何なる性質 (文法的な意味) を発揮するのかを考え、同じ文法的な意味を持つ名詞・動詞の一般化した意味 (本稿では、これをカテゴリカルな意味と呼ぶ) を《 》の中に表示している。

<sup>11</sup> コーパスと共に配布された CD に収録されている検索ツール「ひまわり」を使い、正規表現 ([込こ][まみむめも]) を用いて検索した用例から、手作業で用例を収集した。

表3 V1と同じ構文構造を持つ「V1+こむ」の構文構造の類型

	「V1+こむ」の構文構造	「V1+こむ」の例	例
自動詞	【N <sup>12</sup> ガ《主体変化》Vi】	だまりこむ, ねこむ	慶子が(病気で)ねこむ
	【Nガ《もの》ニ《付着》Vi】	すわりこむ, とまりこむ	竜野は椅子にすわりこむ
	【Nガ《空間》ニ《移動》Vi】	あがりこむ, おちこむ	太郎が(勝手に)部屋にあがりこむ
	【《人》ガNに《心理》Vi】	ほれこむ	太郎が彼女にほれこむ
他動詞	【Nガ《もの》ヲ《対象変化》Vt】	きりこむ, にこむ	(赤ワインで)鶏肉をにこむ
	【Nガ《もの》ヲ《もの》ニ《付着》Vt】	そそぎこむ, うめこむ	汁を口にそそぎこむ
	【Nガ《もの/人》ヲ《空間》ニ《移動》Vt】	おくりこむ, なげこむ	島に多くの兵士をおくりこむ
	【Nガ《もの》ヲ《接触》Vt】	けりこむ, だきこむ	花子の首を(両手で)だきこむ
	【NガNカラNニ《もの》ヲ《所有移動》Vt】	うりこむ, かいこむ	外国に武器をうりこむ
	【《(人)ガ》《(こと)ヲ》《人間活動動詞》Vt】	はなしこむ, おしえこむ	(一晩, 二人きりで)はなしこむ
	【《人》ガ《こと》ヲ(引用句ト)《心理》Vt】	おぼえこむ, おもいこむ	芸をおぼえこむ

次の2.2からは、上記の構文構造とそれに基づいた動詞のカテゴリカルな意味を中心に類型化したグループごとに、V1とは異なる①「V1+こむ」の形態的な特徴と文法的な特徴、②「V1+こむ」と組み合わさる名詞・副詞の語彙的な意味の特徴、③「V1+こむ」が使われる文全体の意味などを明らかにすることを試みる。

## 2.2. 自動詞の「V1+こむ」

本節では、「程度進行」を表すと考えられる「V1+こむ」のうち、自動詞の場合について述べる。自動詞の「V1+こむ」には、《主体変化》、《付着》、《移動》、《心理》のカテゴリカルな意味を持つものがあり、そのカテゴリカルな意味によって、それぞれの構文も異なる。

<sup>12</sup> 特定のカテゴリカルな意味を取ることができない場合は、Nと表示する。

## 2.2.1. [Nガ《主体変化》Vi]の「V1+こむ」

表4 《主体変化》Viタイプの「V1+こむ」

V1が《人の主体変化》 かがみこむ (20) <sup>13</sup> だまりこむ (79) ねこむ (55) ねむりこむ (41) ふけこむ (12) V1が《ものの主体変化》 きれこむ (14) ずれこむ (15) ひえこむ (32)
---

《主体変化》Viの「V1+こむ」とV1との違いとして挙げられるのは、まず文法的な意味である。この節の「V1+こむ」は、《主体変化》としてまとめているものの、実際、V1が真面に主体の変化を表していることに対し、「V1+こむ」はV1の変化の結果による主体の状態を表していると考えられる。例えば、「V1+こむ」の前後には、主体の変化の結果による状態を表している連用修飾語（副詞もしくは副詞相当句）が共起する 경우가多いが、その理由も「V1+こむ」が主体の状態を表しているからだと考えられる。下記の(6)のような「きれこむ」や「ひえこむ」の場合、状態を表している連用修飾語の使用が多く見られるが、V1の「きれる」や「ひえる」にはそのような傾向は見られない。

(6) 加えて葉は羽状に細かく切れこむ。(花おりおり)

さらに、このグループの「V1+こむ」は、時・空間的に一次的・個別的な事態より、長時間もしくは時・空間を超えた事態を表す場合が多々ある。これは、特に人の変化を表すV1が使われた文の中で、空間のデ格名詞や時間のニ格名詞で現れる状況語が頻繁に現れることに比べ、「V1+こむ」の場合、そのような用例があまり見つからないことも関係する。次の用例を参照されたい。

(7) その夜は、和代が床の上で、沖とあけみが畳の部屋で寝た。(毎日が日曜日)

(8) 体の調子は悪く、1年生の冬に風邪をこじらせ1ヶ月半も寝込んでしまった。  
(ひとを治療するということ)

(9) その夜、清子の焼いた信楽の器が並んでいる座敷の片隅で瑞香は眠った。  
(母さん子守歌うたって)

(10) 才蔵は、つい、うとうとして眠りこんだ。(猿飛佐助)

上記の用例(7)の「ねる」や(9)の「ねむる」の場合、「その夜」、「座敷の片隅で」などの状況語を使うことにより、主体の状態変化が「どこで、いつ起きたのか」が分かりやすくなる。つまり、「その夜」、「座敷の片隅で」などの状況語は、事態に具体性・個別性を付与する役割を果たす。しかし、「ねこむ」や「ねむりこむ」の場合、長時間を表す「1ヶ月半も」や、様態を表す「うとうとして」などが使うことで、「V1+こむ」が一時的、かつ個別的な事態を表すものではなく、主体の状態を表しているからだと考えられる。

<sup>13</sup> () の中の数字は、コーパスで取り出した各「V1+こむ」の用例数である。

また、「V1+こむ」とV1の違いは、それぞれ許容される構文の範囲が異なることから確認できる。例えば、「きれる」の場合、「葉っぱが切れる」など、状態の変化の意味を表す以外に、「電池が切れる」など、「使い果たした」という時間の終わりの局面を表す場合もある。しかし、「きれこむ」は時間的な局面を表すことはできない（「\*電池がきれこむ」）。これは「きれこむ」の文法的な意味が状態を表すことに深く関わっており、ある特定の時間の局面を表すことは出来ないからだと思われる。

一方、このグループの「V1+こむ」の形態的な特徴としては、テシマウ形がよく表れることも挙げられる。このグループの人名詞が主語である「V1+こむ」の場合、テシマウ形で表れた用例が25%ほどで、全体の用例の割合から考えても、また、V1に比べても、非常に高い比率を占めている。

表5 《主体変化》の「V1+こむ」とV1のテシマウ形の割合

形態 \ V1	寝る	ねむる	だまる
V1のテシマウ形	34/957 (約4%)	47/882 (約5%)	27/1081 (約0.3%)
「V1+こむ」のテシマウ形	16/55 (約29%)	10/41 (約24%)	18/76 (約23%)

テシマウ形は森山（1988）によると、主語の無意志化により、文全体が望ましくない意味を持つことになるという機能を持つ補助動詞である（森山（1988: 206-207））。森山に従ってテシマウ形の「V1+こむ」の文の主語について考えてみても、確かに無意志化しているともいえる。(11)の場合、テシマウ形だけではなく、波線の連用修飾語「泥のようになって」によって、無意志性や、望ましくないニュアンスが強調されている。

(11) ジュネーブ湖のあたりをさまよい、辻公園で催されていたノミの市をのぞいてまわったりもしてみたが、ついに音をあげ、夕暮れを待たずにベッド・イン。そのまま泥のようになって寝こんでしまい、目が覚めたのは、つぎの日の早朝であった。  
 (魅惑の車窓地を這う旅へ)

ただ、現段階では、テシマウ形の「V1+こむ」が多く表れる理由についてはまだ考察中である。この部分については、今後の課題にしたい。

### 2.1.2. [Nが《もの》ニ《付着》Vt]の「V1+こむ」

表6 《付着》Viの「V1+こむ」

V1の主体が人名詞
すわりこむ (115) すみこむ (25) とまりこむ (15) のりこむ (311) しのびこむ (78) はいりこむ (296) へたりこむ (24)
V1の主体がもの名詞
うまりこむ (2) しみこむ (107) しずみこむ (29) はまりこむ (12) まぎれこむ (50)

[Nが《もの》ニ《附着》Vi] の「V1+こむ」は、まず、人名詞が主体になりやすい「V1+こむ」の場合、特に二格名詞の語彙的な意味において違いが見られる。V1と「V1+こむ」の二格名詞を比較してみると次のようになる。

表7 《附着》のV1と「V1+こむ」の二格名詞の特徴

人が主体である動詞	V1の二格名詞	「V1+こむ」の二格名詞
「すわる」と「すわりこむ」	「男の左側/席/椅子」等、主に「席」	「床の上/歩道/その場」等、場所
「すむ」と「すみこむ」「とまる」と「とまりこむ」	「家/部屋/地域」等、主に居住場所	「他家/パチンコ屋/病院」等、一般的な居住場所ではない場所
「のる」と「のりこむ」	「自転車/バス」等、主に交通手段	「電車/お城/部屋/応援」等、交通手段や場所

「V1+こむ」と組み合わさる名詞は、V1が伴う二格名詞とはその意味の面で異なっている。例えば、「すわりこむ」の場合、「(抗議のため)道端にすわりこむ」などのように、話者の主観に関わる意味が付加された場合が多い。そのため、「すわる」を「すわりこむ」に置き換えるのはそれほど違和感が生じないが、「すわりこむ」を「すわる」に置き換えるのは難しい場合が多々ある。また、「すみこむ」や「とまりこむ」などと組み合わさる二格名詞の前後に、附着(もしくは存在)の理由に関する付加的な説明がなされている場合が多い。

(12) 「中流」階層の女性においては、近代化の初期段階には、家業をふくむ家事に従事しながら、裁縫を中心とした習い事や稽古事をして、あるいは他家に修業・修養のために住み込んで、結婚にそなえるというのが、一般的な、結婚までの人生の時間のすごし方であった。

(共同の時間と自分の時間)

(13) 息子は実験で大学に泊まりこんでいました。

(やがて幸福の糧になる)

(12) や (13) の二格名詞の「他家」、「大学」はその語彙的な意味から、一般的に住む、もしくは泊まる場所ではない。もし、上記の用例の波線の部分、「修業・修養のために」や「実験で」がなければ、落ち着きがない文になってしまう。しかし、この波線の部分により、「泊まるしかない」理由が補われることで、文全体が自然に感じられる。

一方、このグループの「V1+こむ」は共起する副詞においてもV1との違いが見られる。「すわりこむ」、「とまりこむ」、「すみこむ」などは、長時間・長期間を表す時間副詞と共起する場合が多い。勿論、V1の「すわる」、「とまる」、「すむ」も「一時間/今夜/一週間/10年」などの時間の長さを表す副詞と共起しうるが、「V1+こむ」と共起する副詞は物理的な時間の長さを表す時間副詞というより、話者にとって、その動作が行われる時間が短くないというニュアンスが含まれている場合が多い。それと関係して「副詞+助詞「も」」が多いことも一つの特徴である。次の用例(14)-(15)を参照されたい。

- (14) ところが余計にこじらせてしまった。虚ろな目のまま、おふみは半刻(一時間)も座り込んでいた。 (あかね空)
- (15) 仕事こそ遊びだという感覚で、眠っているときも仕事のことを考え、会社に何日も泊まりこんで自宅に帰らなくても平気だと聞きました。 (得意株つくって楽に儲けよう)

以上のことから、このグループの「V1+こむ」は、V1とは異なる、名詞や状況語、また共起する副詞などによって、話者による主観的な評価が文全体に含意されているという特徴が見られる。

### 2.1.3. 【《人・もの》ガ《空間》ニ《移動》Vi】の「V1+こむ」

表8 《移動》Viの「V1+こむ」

あがりこむ (26) (空間・不景気に) おちこむ (236) なだれこむ (24) にげこむ (74)
--

このグループの「V1+こむ」は、共起する連用・連体修飾語において、①大量の意味を持つ、②望ましくない意味を含んでいる、という特徴が見られる。まず、《移動》Viの「V1+こむ」は「大量」という意味を持つ量・程度・頻度・時間副詞と共起する用例が多く見られた。その際に、ガ格名詞である主体は下記の(17)の「流民が」のように、量・程度副詞の助けがなくても、複数(大勢の人や組織)として意味が取れる場合もある。

- (16) 我が国のトルコへの輸出が前年に引き続き大幅に落ち込んだのは、同国の外貨事情の悪化による対日輸入代金支払遅延問題が78年に入っても好転しなかったためとみられる。(通商白書)
- (17) このような年には、中国から大量の流民が満州になだれ込んできた。(真実の中国4000年史)

このような大量の意味を持つ副詞は「V1+こむ」の語彙的な意味と関わって、話者や文の登場人物にとって、事態が望ましくないというニュアンスをもたらす。上記の(16)-(17)も、結果的に「望ましくない」という話者の意識が含意されている。

一方、次の(18)-(19)の用例は、上記の(16)-(17)と同じく、否定的なニュアンスを表しているが、副詞自体に否定的な意味が含まれている場合である。

- (18) 若干の不心得者はどこの社会でもおるわけでございまして、そういった状況から最近いろいろ不祥事がふえてきたということについては、社会的にやはり一般的な緩みが出てきて、みんなで渡れば怖くないといいますが、その中でも一般的な接待から過剰な接待に落ちこむというような状況が出てきたのではないかと考えておるわけです。(国会議事録)
- (19) 取次ぎに出た女子衆たちは、このひとを上げてよいものやら、どこへ通したらよいか、戸惑ってしまうけれど、そこは人あしらいの客商売に馴れたひとなら、番頭をはじめ庭番の爺やに至るまで、たとえあめ玉ひとつでも言葉を添えて配りものをし、いつのまにやら勝手にずんずん上りこんでしまうようになっているのであった。(蔵)

用例 (18)-(19) は語彙的な意味に望ましくない意味が含まれている連体修飾語や連用修飾語を使い、文全体に望ましくない意味をもたらしている ((18) の「過剰な」、(19) の「勝手に」)。さらに、(19) の場合、様態副詞の「ずんずん」も結果的に望ましくない意味を表すことになったと思われる。このように「V1+こむ」の文が否定的な意味を持ちやすいことは、単に否定的な意味を持つ副詞と共起したからではなく、そもそも否定的な意味が「V1+こむ」の意味と関わっているからだと考えられる。

#### 2.1.4. 【《人》ガNニ《心理》Vi】の「V1+こむ」

今回の調査では、《心理》Vi の「V1+こむ」は、「ほれこむ」(25 例) しか見つからなかった。そのため、このグループの特徴の一般化は難しい。しかし、用例から「ほれる」と「ほれこむ」と組み合わせる二格名詞の意味的な面を比較した結果、若干の違いが見られた。

表9 用例から取り出した「ほれる」、 「ほれこむ」と組み合わせる二格名詞

「ほれる」	「ほれこむ」
あたし / 八重垣の清搔 / 中川 / あいつ / 彼 / 男性 / 男 (以上, 人名詞) 亭主になる男の事業 / 彼の二の腕 / その謙虚な性格 / あのデザイン / のよさ / その口調 (以上, もの, 抽象名詞) 等	ドアや窓 / 商売女 / お縫 / 女房 / 紀伊子の夫になる男 / 沖繩 / 画家 / (以上, もの, 人名詞) 篠原という存在 / その思想 / その熱意 / 派遣システム / その企業 / 彼の念流剣術の腕 (以上, 抽象名詞) 等

上記の表9の二格名詞の性質は、そのカテゴリカルな意味がどちらも《こと》、《人》の名詞だという点で、似ているように見える。しかし、《こと》名詞において、その二格名詞の文法的な性質が異なっている。「ほれる」の場合、二格名詞が《こと》である場合、その二格名詞が直接対象ではなく、対象の側面であり、対象にほれた原因を表している。次の用例を参照されたい。

(20) 男と結婚はしたい。亭主になる男の事業に彼女は惚れた。 (宮部みゆきが読まれる理由)

一方、「ほれこむ」と組み合わせる二格名詞が《こと》である場合は、「ほれこむ」の直接的な対象になる。

(21) 斉田は斬新な派遣システムに惚れ込んでいた。 (逃げない人を、人は助ける)

つまり、「ほれる」も「ほれこむ」も、《人》や《もの》名詞であり、基本的に二格名詞が対象になるが、二格名詞が《こと》の場合、「ほれこむ」の対象の範囲は「ほれる」の対象とずれが生じる。

しかし、以上のことだけでは《心理》Vi の「V1+こむ」の特徴の一般化が十分に成されたとは考えられない。今後より詳しい考察を通して、このグループの特徴の一般化を行いたい。

### 2.3. 他動詞「V1+こむ」

本節では、「程度進行」の意味をもつ他動詞の「V1+こむ」について、その構文構造を《対象変化》、《付着》、《移動》、《接触》、《所有移動》、《人間活動》、《心理》のカテゴリカルな意味によって分類し、その特徴について考察する。

#### 2.3.1. [Nガ《もの・こと》ヲ《対象変化》Vt]の「V1+こむ」

表 10 《対象変化》Vtの「V1+こむ」

V1が《対象変化》Vt
かりこむ (13) (色紙を) きりこむ (13) けずりこむ (2) しめこむ (2) たおしこむ (2)
にこむ (42) しほりこむ (55) たきこむ (3) ねりこむ (8) (土地を) ほりこむ (3)
みがきこむ (3)
V1が《生産》Vt
つくりこむ (6)

《対象変化》Vtのタイプに属する「V1+こむ」は、その異なり語数は多いが、「にこむ」、「しほりこむ」を除くと、全体的に用例数が少ない。また、《対象変化》Vtの「V1+こむ」は、V1にそのまま置き換えても違和感がないものが殆どである。次の用例を参照されたい。

(22) この扉の前に、一人の男が濃いグレーのスーツに身を包み、頭には幅広の麦藁帽をかぶり、上品で物思わしげな顔は短く刈りこんだ白髪まじりの金髪と英国人風の頬髯で輪郭づけられて立っていた。 (残酷な女たち)

(22') (前略) 上品で物思わしげな顔は短く刈った白髪まじりの金髪と英国人風の頬髯で輪郭づけられて立っていた。

(22)-(22')のように、V1にそのまま置き換えても違和感がないことが、《対象変化》の「V1+こむ」の用例が少ない理由の1つであると考えられる。ところが、逆にV1を「V1+こむ」に置き換えるのは違和感が感じられる。これは、このグループの「V1+こむ」は、意味の特殊化が行われているからだと考えられる。また、このグループの「V1+こむ」は、形態的特徴もあり、連体形で使われる場合が多い。

表 11 《対象変化》Vtの主な「V1+こむ」の連体形の割合

V1+こむ	かりこむ	きりこむ	にこむ	しほりこむ	ねりこむ
連体形/全体	9/14 (64%)	2/12 (17%)	13/43 (30%)	31/54 (57%)	6/8 (75%)

表 11 は、本稿で調査した用例のうち、各「V1+こむ」が連体形で現れた割合を表したものである。しかし、V1は、ある特定の形が多く見られる傾向は見えない。次の用例を参照されたい。

- (23) ときどき、刈込みをしなくなって何年か経っているらしい生垣が見える。ほうほうと伸びてしまった生垣だ。上に伸びすぎて、下のほうは葉がなくて透けてしまっている。住む人がいなくなった家か、その家の主人が年老いて刈込み力をなくした家か。 (にっぽん風景紀行)
- (24) また、犯罪捜査の過程で容疑者となる可能性を有する者が複数の観点（例えば、A 企業の関係者、B 地域の居住者等）からそれぞれ多数把握された場合、コンピュータで重複者の検索を行うことにより、容疑者の範囲を絞り込む多角照合システムの開発、普及を進めているほか、次のようなシステムの開発、運用に努めている。 (警察白書)

一方、このグループの「V1+こむ」は、量（大量・長時間）を表す副詞や様態を表す副詞などとよく共起するが、多くの副詞は、《主体変化》を表す「V1+こむ」と同じく、状態を表すことに深く関わっている。以上のことから考えると、《対象変化》を表す「V1+こむ」は、《主体変化》を表す「V1+こむ」と同じく、V1とは異なって、単に状態を表すことに意味の焦点があると思われる。

### 2.3.2 [Nガ《もの/こと》ヲ《もの/こと》ニ《付着》Vt] の「V1+こむ」

表 12 《付着》Vt の「V1+こむ」

<p>V1 が《付着》 Vt          いれこむ (ものをいれる) (16) うえこむ (11) うめこむ (69) くわえこむ (8) しまいこむ (41)          そそぎこむ (57) ためこむ (52) つぎこむ (75) つけこむ (23) くるみこむ (4) つみこむ (49)          つめこむ (86) もりこむ (362) (帽子に髪を) たくしこむ (3)          V1 が再帰動詞で《付着》 Vt          きこむ (25) しょいこむ (21)</p>
--

まず、「V1+こむ」と組み合わせる名詞の特徴から述べる。用例を見ると、このグループの V1 と組み合わせるヲ格名詞のカテゴリカルな意味は、《もの》の場合が一般的であるが、「V1+こむ」は、次の (25)-(26) のように抽象的な《こと》名詞が使われる場合も多くみられる。特に「もりこむ」、「しょいこむ」、「つつみこむ」と組み合わせるヲ格名詞は、そのヲ格名詞の多くが「内容」、「考え」、「責任」などの抽象的な意味を持つ《こと》名詞である。

- (25) 彼女は高沢が嫌いではない。何事に対しても積極的で若者らしい燃えるような好奇心の持ち主である。その旺盛な好奇心には衣子が辟易するほどである。若者としての可能性と未知を一杯に詰め込んだような男であった。 (銀河鉄道殺人事件)
- (26) 平成 13 年度は、このパンフレットの中に、住宅防火診断チェックリストを盛り込んだものを作成した。 (諧調は偽りなり)

また、二格名詞においては、V1 と同じく、二格名詞のカテゴリカルな意味は《もの》、もしくは《ものに準ずること》であり、付着先を表す。しかし、より詳しく用例をみると、単なる《もの》名詞よりも、「～の中に」、「～の奥に」など、より内部性が補われている

場合が多い。特に、「いれこむ」、「うめこむ」、「つけこむ」、「つつみこむ」の場合、下記の用例 (27)-(28) の四角の部分のように、二格名詞に内部性がある場合が多かった。

(27) さて、トーマスは歴史のもつれ合いを論じる中で、客体化という視点を問題としている。一方サーリンズも、「こうして存在論的にかつてなかったことを、よく知っている概念に取り込むことによって、人々は彼らの現在を過去の中に埋め込んだのである。

(反・ポストコロニアル人類学)

(28) 「その後、大杉たちは菊富士ホテルへおさまってしまったよ」しばらくの間を置いて、宮嶋は切りだした。自分の感情を心の中に包み込んでおくということの出来ない男なのだ。

(諧調は偽りなり)

一方、「つぎこむ」、「つみこむ」の場合、組み合わせるヲ格名詞、二格名詞がV1とはあまり組み合わせられない、特別な意味を持つ名詞に限られている。

(29) たとえば、いま日本で一番問題になっている不良債権だが、その中身はというと不動産、土地である。バブル期にはゴルフ場会員権などに、やたらとたくさんのお金をつぎ込んだ。

(儲かる企業の新常識)

(30) 「体の自由のきく者はほとんどおらぬ。御武器、御道具などを船に積み込むための人夫が要る」茂兵衛は会所にいるエゾ人に、トコロに行って荷役人夫を連れて来るようにと指図した。

(医者と侍)

(29) の「つぎこむ」の場合、そのヲ格名詞は「金・財産」などがほとんどであり、その際、二格名詞には「パチンコ、ギャンブル、不動産」など、望ましくない意味を持つ「金の使用先」がくる。また、(30) の「つみこむ」の場合、二格名詞が「船、汽車、トラック」など、運送手段に限られる(下記の用例(31)を参照)。つまり、「つみこむ」は、V1よりも意味的に特殊化したと思われる。

(31) 押入れの中に荷物を積み込んでおく/積んでおく。(作例)

なお、《附着》Vtの「V1+こむ」と組み合わせる副詞の特徴としては、長期・大量の意味を持つ量副詞と共起する用例が多かった。また、「大量」と関係して、「もりこむ」、「ためこむ」などは、ヲ格名詞が複数あることを表す連体修飾語によって対象が大量であることを表す場合もある。次の用例を参照されたい。

(32) その一方で、「ジャンルの汚染は有益」であり、「詩には常にかなりな程度の散文を盛り込む必要がある」とも言っている。

(驚か太陽か?)

(33) ダムは水をため込むだけではなく、川を流れる大量の土砂もため込んでいきます。

(川辺川ダムはいらん!)

最後に、「もりこむ」、「つめこむ」、「うめこむ」の用例には、V1に比べて受身形が多く見られる傾向があった。

表 13 用例に見られる《付着》Vtの「V1+こむ」とV1の受身形の割合

形態 \ V1	うめる	つめる	もる
V1の受身形	47/348 (約 13%)	0/10 (0%)	52/236 (約 22%)
「V1+こむ」の受身形	36/69 (約 52%)	25/86 (29%)	175/362 (約 48%)

このような傾向について、V1である「うめる」、「つめる」、「もる」は、そのヲ格に具体的なもの名詞が来る場合が多いのに対し、「うめこむ」、「つめこむ」、「もりこむ」の場合では、受身形の主語に抽象名詞がよく現れるが、これとなんらかの関係があると思われる。これに関するより詳細な考察は、今後の課題にしたい。

### 2.3.3. 【Nガ《もの/人》を《空間》ニ《移動》Vt】の「V1+こむ」

表 14 《移動》Vtの「V1+こむ」

V1が主にものの移動を表す おくりこむ (123) おとしこむ (15) なげこむ (78) はこびこむ (87) ほうりこむ (98)
V1が主に人の移動を表す さそいこむ (24) よびこむ (19) つれこむ (54)

《移動》Vtの「V1+こむ」の場合、特に用例が多い「おくりこむ」、「ほうりこむ」などにおいて、組み合わせるヲ格名詞は、「自衛隊を送り込む」のような、団体や組織など、すでに複数の意味が含まれている場合が多い特徴がある。また、ヲ格名詞が単数の場合でも、「多くの猫を放り込む」のように、大量の意味を持つ連体修飾語によって名詞が修飾される場合も多々ある。

一方、二格名詞には、V1と同じく基本的に場所名詞が来るが、下記の(34)-(35)のように、V1の場合はV1と十分組み合わせる一般的場所名詞が、「V1+こむ」とは組み合わせることができない場合が少なくない。

(34) 先生のお宅にたくさんのプレゼントを送った。送り込んだ。(作例)

(35) カメラを海に落とす。落とし込む。<sup>14</sup>(作例)

副詞については、前に述べたヲ格名詞の大量性と深く関係があり、大量/頻度を表す副詞とよく共起する。さらに、ヲ格名詞が単数である場合、次の(36)のような「次々と」や「続々と」、「順次に」などの動作の継続的な様子をあらわす副詞と共起する場合が多いことも一つの特徴である。

<sup>14</sup>「おとす」と「おとしこむ」は、意志性において性質が異なる。「おとす」は【《もの》ヲ《空間》ニ《移動》Vt】の構文構造では、無意志的動作と判断される場合もある。しかし、「おとしこむ」の場合は、同じ構文構造である場合、意志動詞としてしか判断できない。用例(35)も、二格の問題ではなく、「おとしこむ」が無意志的に解釈できない可能性もある。

(36) 「内侍司では、良房さまが帝を政務から遠ざけるために、次々と女性を送りこんでいらっしゃる、と噂しています」 (淳和院正子)

一方、V1 がものの移動を表す「V1+こむ」は、形態的に他グループの「V1+こむ」と比べ、比較的を受身形で現れる割合が高いという特徴が見られる。

表 15 用例に見られる《移動》Vt の主な「V1+こむ」の受身形の割合

V1+こむ	おくりこむ	おとしこむ	はこびこむ	ほうりこむ	なげこむ
受身 / 全体	12/37 (30%)	3/14 (21%)	44/87 (50%)	20/97 (20%)	26/78 (33%)

これらの「V1+こむ」に受身形が多いことには、最初、V1 の語彙的な意味の影響があるとも考えられたが、実際に調査した結果、上記の中でも比較的受身形が多い「おくりこむ」の V1 (「送る」) の受身形の割合は約 14%、「はこびこむ」の V1 (「運ぶ」) の受身形の割合は約 20% に留まっていた。このグループの「V1+こむ」が受身形で多く使われる理由については今後の課題としたい。

なお、《移動》Vt の「V1+こむ」の中で、「さそいこむ」、「つれこむ」、「よびこむ」は、上記の「おくりこむ」などの移動とは性質が違い、結果的に人間の移動を表す。これらの動詞は、殆どヲ格名詞に《人》名詞が来て、主体が行った V1 の動作により、移動するという意味を持つことになる。そのため、典型的な《移動》を表す動詞とは言いがたい部分もある。例えば、共起する副詞において、「さそいこむ」などは「おくりこむ」などとは違う特徴が見られ、大量の意味を持つ副詞とはほとんど共起せず、次の (37) のように、動きを特徴づける副詞と共起する場合が多い。このようなことから、主体のカテゴリカルな意味の特徴も考察する必要があると考えられる。

(37) ソフィーがアイリッシュを部屋にこっそり連れこむのを見て、チェルサは不安になった。

(キスは運命の味)

#### 2.3.4. [N ガ《もの》ヲ《接触》 / 《作用》 Vt] の「V1+こむ」

表 16 《接触》Vt の「V1+こむ」

V1 が《接触》Vt
かかえこむ (94) かこいこむ (20) けりこむ (4) だきこむ (17) にぎりこむ (6)
のみこむ (259) すいこむ (198) すすりこむ (8) <sup>15</sup>
V1 が《作用》Vt <sup>16</sup>
つかいこむ (23)

《接触》Vt の「V1+こむ」は、V1 との違いが明確でない部分が多い。組み合わせるヲ格名詞においても、そのカテゴリカルな意味は、V1 と同じく《もの》を表す名詞が多い。

その中で「かかえこむ」、「かこいこむ」、「だきこむ」は、「悩み」や「ストレス」など《こと》名詞である場合もあるが、これらはV1にも現れる。

しかし、V1が多様な名詞と組み合わせられて、様々なカテゴリカルな意味を持つものに対して、「V1+こむ」はカテゴリカルな意味に制約がある場合もある。例えば、「にぎる」は「手をにぎる」などは、《接触》というカテゴリカルな意味も持つが、「すしをにぎる」《生産》という意味も持つ。しかし、「にぎりこむ」は、《生産》という意味は持たない（「\*すしをにぎりこむ」）。

なお、《作用》Vtの「つかいこむ」の場合、「筆」や「シーツ」のような《もの》を表す名詞と組み合わせると、「道具などを十分に、また長く使う」という意味になるが、「金」（特に大金）に関わる意味のヲ格名詞と組み合わせる場合、「会社の金、一億円近くを使い込んでいた」のように、「つかいこむ」の意味は「浪費する」という意味として使われる。本稿では、後者の場合、名詞の意味に限定があることから、より特殊化したものと判断し、その詳細を割愛した。

### 2.3.5. 【《人》ガ《人》カラ《もの》ヲ《人》ニ《所有移動》Vt】の「V1+こむ」

表 17 《所有》Vtの場合の「V1+こむ」

うりこむ (47)    かいこむ (39)    はらいこむ (19)
--------------------------------------

このグループの「V1+こむ」は、まず、「大量の缶詰をかいこむ」のように「大量」の意味のヲ格名詞、「大量」の意味の修飾語によって規定されるヲ格名詞と組み合わせる場合が多い。さらに、「大量」の意味のほか、「高価の機械を買い込む」など、「大型」もしくは「高価」の意味を持つヲ格名詞と組み合わせる場合もある。同様に、副詞との共起に関しても、「かいこむ」の場合、大量・高頻度の意味の様々な副詞<sup>17</sup>とよく共起することが確認できる。

なお、《所有》Vtの「V1+こむ」が使われる文は、ある目的のために、主体の強い意志による「所有権の移動」が行われるという意味を表す場合が多い。

(38) 就職シーズンを迎えて、数ヵ月まえに設立されたばかりのオリエン特・リースのことを経済雑誌で読んだ神田は、とびこみで押しかけて強引に自分を売りこんだあげく、同社の設立メンバーだった岩井らに覇気を買われて採用されたのである。 (国別・外人接待法)

用例(38)は、主体が意味の中心になり一方的な所有移動が行われている。また、所有移動の際、相手を表す二格名詞やカラ格名詞がよく省略される。このような主体による一

<sup>15</sup> 本稿では、「のみこむ」などを《接触》Vtのグループに入れているが、実際、典型的な《接触》Vtとは構文構造や語彙的な意味において異なる側面が多く見られる。この部分については、今後の課題とする。

<sup>16</sup> 《作用》Vtは語彙的な意味を変えずに、様々な名詞と自由に組み合わせることができる特殊なグループであるが、「V1+こむ」の形では、「つかいこむ」のほか、殆ど現れない（「\*変えりこむ」、「\*直しこむ」）。

<sup>17</sup> 本稿の用例からは、「かいこむ」と共起する副詞には次のようなものがあった。

「何種類も/予算以上に/いっぱい/何冊も/五ヶずつ/たくさん/ばかに/アホほど/しこたま/1万枚/うんと(程度)旅に/どんどん/その度に(頻度)」等

方的な所有の移動は、その行為が望ましくないという意味にまで繋がる場合が多い。このような意味を表すときは、「強引に」などの否定的な意味を表す副詞や、副詞相当句で使うことも少なくない。このような主体の一方的な所有移動は、V1である「うる」、「かう」が使われる文には見られない特徴である。

### 2.3.6. 【《人》ガ《こと》ヲ(《人ニ》)《言語活動》Vt]の「V1+こむ」

表 18 《人間活動》Vtの「V1+こむ」

V1が《言語活動》Vt おしえこむ (36) だんじこむ (2) はなしこむ (40) よみこむ (55) V1が《遂行》Vt たのみこむ (33)
---

このグループの「おしえこむ」、「はなしこむ」のV1は、様々な構文構造を取ることが可能であるのに対し、「V1+こむ」はV1の構文構造のうち、ある特定の構文構造に集中する傾向が見られる。

表 19 V1と「V1+こむ」の構文構造の比較

V1と「V1+こむ」	V1の構文構造	「V1+こむ」の構文構造
「おしえる」と 「おしえこむ」	【《人》ガ人ヲ《言語活動》】 【《人》ニ《こと(知識)》ヲ《言語活動》】 【《人》ニ《こと(情報)》ヲ《言語活動》】	【《人》ニ《こと》ヲ《言語活動》】
「はなす」と 「はなしこむ」	【《こと》ヲ《言語活動》】 【《人》ニ《こと》ヲ《言語活動》】 【《人》ト《言語活動》】	【《人》ト《言語活動》】

表 19のように、特定の構文構造に集中した「V1+こむ」は、多義的な意味をもつV1に比べ、構文構造によって意味も限定される。

さらに、「おしえこむ」、「よみこむ」の場合、ヲ格名詞と組み合わせられるが、その素材動詞であるV1もヲ格名詞と組み合わせられる。しかし、用例からみると、語彙的な意味の面で若干の違いが見られる。次の表 20 に用例から見られた主なヲ格名詞の例を挙げておく。

表 20 「V1+こむ」・V1 と組み合わさるヲ格名詞の例

V1 と「V1+こむ」	V1 のヲ格名詞	「V1+こむ」のヲ格名詞
「おしえる」と 「おしえこむ」	「科学/無常/お金の価値/人を斬ること/竿の扱い方/鳴き方」等	「剣術の魅力/芸/技能/価値観/人生観/ルール/経済学/孝, 仁, 礼, 義などの道」等
「よむ」と 「よみこむ」	「本/新聞/解説原稿/看板/真意/言葉」等	<div style="border: 1px solid black; padding: 2px;">人主語</div> : 「新聞/資料/認識/業績/異なる感懐」, 等 <div style="border: 1px solid black; padding: 2px;">もの主語 (パソコン, 機械等)</div> : 「CD/データ- / キャッシュ/画像/申請書/FAX 信号/曲」, 等

例えば、「覚える」の場合、「学問」、「方法」などを表す抽象名詞や、「概念」を表す抽象名詞がそのヲ格名詞として現れるが、「覚えこむ」は「長期間の修練」という意味の特殊化が起きる。さらに「よみこむ」は、主語のカテゴリカルな意味にも変化が起き、V1 である「よむ」とは異なる新しい意味（「パソコンがデータをよみこむ」）を持つことになる。

なお、このグループの場合、V1 や「V1+こむ」がともに量にかかわる副詞とよく共起するため、大きな違いは見られない。その中で、「おしえこむ」は、「無理やり」「一方的に」など、行動に対する望ましくないニュアンスをもたらす副詞と共起する用例が多く見られる。しかし、これが V1 の影響であるか、V2 である「こむ」の影響なのかは明確ではない。

一方、「よみこむ」の「時々/ほとんど/ちっとも」という副詞は、主語がもの（機械・パソコン）の場合、よく共起する。これらの副詞は、主語が人である場合の「よみこむ」とは共起しにくい。本稿では主語が《もの》である「よみこむ」はすでに複合語というより、単純語化したもの<sup>18</sup>として別扱いすべきであると考えている。

最後に、「たのみこむ」について触れる。「たのみこむ」と V1 である「たのみ」との違いは、反復性にあると考えられる。この反復性は、「よく」などの頻度を表す副詞と共起することによって現れる場合が多い。一方、「たのみこむ」は「無理矢理/無理に」のような副詞ともよく共起し、望ましくない意味を表す場合が多いが、このような場合、反復性は読みとれない。

<sup>18</sup> 「V1+こむ」には、「めりこむ」、「みこむ」、「ふりこむ」のように、その意味から考えると、V1 と後項動詞（以下、V2）の合成による複合動詞というより、ひとまとまりの意味を持つ単純語に近いもの（単純語化したもの）がある。「（データを）よみこむ」の場合も、その面において、単純語化したものに非常に似ている。このような「V1+こむ」に関する考察は、今後の課題としたい。

2.3.7. 【《人》ガ《こと》ヲ(引用句ト)《心理/態度》Vt】の「V1+こむ」

表 21 《心理》Vt の「V1+こむ」

<p>A. 【《人》ガ《こと》ヲ《心理》Vt】  V1が《認識・感覚》  ききこむ(音楽をききこむ)(2) のぞきこむ(282) おぼえこむ(6) かんがえこむ(177)</p> <p>B. 【《人》ガ《こと》ヲ 引用句ト《態度》Vt】  V1が《認識・態度》  おもいこむ(362) しんじこむ(42) / きめこむ(49) まつりこむ(2)</p>
--

このグループの「V1+こむ」には大きく2つの構文構造があると考えられる。以下、AとBタイプに分けた上で、その特徴について詳しく述べる。

A. 【(《人》ガ)(《こと》ヲ)《心理》】の「V1+こむ」

「おぼえこむ」や「かんがえこむ」のV1は様々な構文構造を取ることが可能になるのに比べ、「V1+こむ」はV1の構文構造のうち、ある特定の構文構造に集中する傾向が見られる。

表 22 V1 と「V1+こむ」の構文構造の比較

V1 と「V1+こむ」	V1 の構文構造	「V1+こむ」の構文構造
「おぼえる」と 「おぼえ込む」	【《人》ガ《こと》ヲ《認識》Vt】 【《人》ガ《こと》ヲ《感覚》Vt】	【《人》ガ《こと》ヲ《認識》Vt】
「かんがえる」と 「かんがえこむ」	【《人》ガ《こと》ヲ 認識 Vt】 【《人》ガ 内容と 態度 Vt】	【《人》ガ《心理》Vt】 <sup>19</sup>

このように「V1+こむ」が特定の構文構造に集中することは、「V1+こむ」の意味に特殊化が行なわれたからだと考えられる。すなわち、より広いかつ多義的な意味をもつV1が、「V1+こむ」になることによって、ある特定の意味の精密化が行われたと考えられる。さらに、構文構造が集中する際、構文の中の名詞の語彙的な意味も特定の意味に限定される場合が多い。

なお、このタイプの「V1+こむ」と共起する副詞を、V1と共起する副詞に比べると、さほど大きな違いは見られない。但し、「おぼえこむ」の場合、「自然に、自動的に」や「繰り返し返して」などの反復性との関わりが見られる副詞とよく共起する特徴を持つ。

一方、「かんがえこむ」の場合、様子を表す副詞がよく共起するが、そのほかに、(39)のように付帯状況を表す語もしくは句が伴われる用例も多々ある。

<sup>19</sup> 「かんがえこむ」では、ほとんどヲ格名詞は現れない。全体用例の中ではヲ格名詞が使われたのは一例(「解決策を考え込む」)のみであった。

(39) やがて部長は足元に視線を落し考えこんだ。

(ジェンナーの遺言)

## B. 【《人》ガ《《こと》ヲ》Nト格/引用句ト《態度》Vi】の「V1+こむ」

「おもいこむ」, 「しんじこむ」, 「きめこむ」は, V1とは異なって, ガ格やヲ格名詞で現れる対象への判断の内容がト格名詞(句)や引用句などによって補われている用例が非常に多い(思い込む: 354/362 (約98%), 信じ込む: 36/42 (約86%))。

一方, 「きめこむ」は, 「しんじこむ」や「おもいこむ」ほど, すべての用例が判断内容である引用句やト格名詞を含んでいない。しかし, 引用句が使われる場合は, 下記の(40)のように, 「おもいこむ」, 「しんじこむ」と同じく対象に対するある態度を表しているということから, 本稿では, このグループに入れて考察している。

(40) 私は一時間で昼食を取る習慣がなかったので初めは慣れない早食いに胃が痛くなり苦痛だった。ランチは二～三時間かけておしゃべりをしながらその時を楽しみ、過ごすものと勝手に決め込んでいたからだ。(これで完璧人材育成白書)

このグループの「V1+こむ」と共起するト格に来る名詞や引用句の意味は, 文の全体の意味から考えると, 現実との食い違いがある場合が多い。この食い違いによって, Bタイプ「V1+こむ」の意味に望ましくない意味が現れる場合が多い。上の用例(40)の場合, 点線で示している引用句「ランチは二～三時間かけておしゃべりをしながら, その時を楽しみ, 過ごすものと」は, 「実際はそうではなかった」という現実との食い違いが含まれている。次の(41)の場合も, 現実との食い違いがより明確に現れており, 「おもいこむ」の後の二重波線の部分に現実のことが表されて, 点線の部分との食い違いを表している。

(41) 小説家の弟子になれば, いつかは小説が書けると, 漠然と思い込んでいた私と友人は, 世間知らずであり, 怖れを知らなかった。(極楽とんぼの飛んだ道)

さらに, このような食い違いと関わって, 否定的なニュアンスを持つ副詞が使われている例が少なくない。例えば, 「おもいこむ」は「勝手に/簡単に/漠然と/一途に/てっきり/本当に」<sup>20</sup>, 「しんじこむ」は「本当に/勝手に/固く」, 「きめこむ」は「勝手に」などの殆どマイナスの意味を持つ副詞と多く共起する。このような主体の一方的な様態を表す副詞は, Bタイプの「V1+こむ」と共起し, 望ましくないという意味を際立たせる役割を果たす。

## 2.4. まとめ

「程度進行」の意味をもつ「V1+こむ」をカテゴリカルな意味や構文構造により, 自他合わせて11つのグループに分けた上で, それぞれのグループにおける名詞や副詞の意味の特徴, 「V1+こむ」の文全体の意味的な特徴を中心に考察してきた。これによって把握

<sup>20</sup> 副詞ではないが, 「おもいこむ」の場合, 「～とばかりおもいこむ」という用例も多く見られるが, これも主体の一方的な様態を表すことに深く関わっていると考えられる。

できた「V1+こむ」の特徴は以下のようである。

- ① V1と異なる「V1+こむ」の形態的・文法的な意味の違い
  - i. 変化より単に状態を表すことに意味の焦点がある。

V1が《主体変化》,《対象変化》を表す場合,「V1+こむ」は事柄の変化より,変化の結果によるある状態に意味の焦点が置かれている。
  - ii. V1とは異なる特定の形態を多くとる場合がある。

受身形が多く現れる《付着》Vt,《移動》Vtの「V1+こむ」,テシマウ形が多く現れる《主体変化》Viの「V1+こむ」
- ② 組み合わせる名詞により, V1とは異なる意味で特徴付けられる
  - i. V1と, 組み合わせる名詞のカテゴリカルな意味が同じであっても, 連体修飾語や名詞の抽象化などにより, 語彙的な意味においてV1がとる名詞の違いが見られる。
    - a. 名詞が大量, 長時間, 多回という量的な意味に規定される。《所有移動》の「V1+こむ」の場合に多く見られる。
    - b. V1とはほとんど組み合わせられない抽象名詞と組み合わせる。《付着》《移動》の「V1+こむ」の場合, よく見られる。この際, 用例が多いことも一つの特徴である。

例) 「計画を報告書にもりこむ」 「お金をギャンブルにつぎこむ」 「怒りをのみこむ」
    - c. 望ましくない意味が含まれている名詞と組み合わせられる「V1+こむ」がある。
    - d. 特に「V1+こむ」が《付着》,《移動》というカテゴリカルな意味を持つ場合, 二格名詞において, 「～の中に, ～の奥に」の形で内部性が強化される。
  - ii. 特定の意味をもつ名詞と組み合わせられることにより, 「V1+こむ」の意味も特殊化する場合がある。
- ② 共起する副詞により, V1とは異なる意味で特徴付けられる
  - i. 大量・高頻度・長時間の意味の副詞とよく共起する。特に, 《主体変化》Vi, 《対象変化》Vt, 《接触》Vt, 《所有移動》Vt, 《心理》Vtの「V1+こむ」

例) 「深く紙をきりこむ」 「しばらくかんがえこむ」 「長くつかいこんだペン」 「一晩二人ではなしこむ」 「お土産をたくさん買い込む」等
  - ii. 行動・変化に対し, 望ましくないという意味を持つ様態副詞とよく共起する。特に, 《移動》Vi/Vt, 《所有移動》Vt, 《言語活動》Vt, 《心理》Vtの「V1+こむ」

例) 「勝手にあがりこむ」, 「勝手におもいこむ」, 「無駄にかいこむ」等

### 3. 結論と今後の課題

以上, 「程度進行」の意味を持つ「V1+こむ」について, 「V1+こむ」が持つ構文の構造によってグループ化し, それぞれの形態論的・構文論的特徴を整理した。これによって, 「程度進行」を表す「V1+こむ」が単に「V1の意味の程度進行, (つまり, 深化)」とい

う意味を持つだけではなく、それに伴い、V1とは異なる形態論的・構文論的特徴が見られることが明らかになった。つまり、「V1+こむ」は、要素の意味だけを持つのではなく、すでにひとまとまりの意味を持つ単語として働きを果たすものであろう。

ただ、本稿で「程度進行」の意味を持つと判断し、扱った多くの動詞の中でも、「内部移動」という意味を排除しきれないものも多くあった。本稿では、従来の研究に従い、「V1+こむ」を「程度進行」と「内部移動」の2つに分けることができるという前提の上で考察を行ったが、実際にこのように2つに分けられるということについても再考の必要性があると思われる。このことに関する検討は今後の課題としたい。

## 参考文献

- 奥田靖雄 (1967) 「語彙的な意味のあり方」『教育国語』8号, むぎ書房 (再録: 奥田靖雄 (1996) 『ことばの研究・序説』: 3-29. むぎ書房)
- (1968-1972) 「を格の名詞と動詞とのくみあわせ」『教育国語』12, 13, 15, 20, 21, 23, 25, 26, 28. 教育科学研究会国語部会 (再録: 言語学研究会編 (1983) 『日本語文法・連語論 (資料編)』: 21-149. むぎ書房)
- 影山太郎 (1993) 『文法と語構成』ひつじ書房
- (1999) 『形態論と意味』くろしお出版
- 工藤真由美 (1995) 『アスペクト・テンス体系とテキスト』ひつじ書房
- 新川忠 (1979) 「副詞と動詞とのくみあわせ」試論『言語の研究』: 173-201. むぎ書房
- 早津恵美子 (2009) 「語彙と文法との関わり—カテゴリーカルな意味—」『政大日本研究』第6号: 1-70. (台湾) 政治大学日本語文学系
- 姫野昌子 (1978) 「複合動詞『～こむ』および内部移動を表す複合動詞類」『日本語学校論集』5 東京外国語大学 [81]: 47-70. (再録: 姫野昌子 (1999) 『複合動詞の構造と意味用法』: 59-82. ひつじ書房)
- 松田文子 (2004) 『日本語複合動詞の習得研究—認知意味論による意味分析を通して』ひつじ書房
- 松本曜 (1998) 「日本語の語彙的複合動詞における動詞の組み合わせ」『言語研究』第114: 37-83. 日本言語学会
- 松本曜 (2009) 「複合動詞「～込む」「～去る」「～出す」と語彙的複合動詞のタイプ」『語彙の意味と文法』: 175-194. くろしお出版
- 宮島達夫 (1972) 「無意味形態素」国立国語研究所編『ことばの研究4』秀英出版 (再録: 宮島達夫 (1994) 『語彙論研究』: 121-136. むぎ書房)
- 森山卓郎 (1988) 『日本語動詞述語文の研究』明治書院

## 用例出典

国立国語研究所『現代日本語書き言葉均衡コーパス』(2009年度DVDモニター公開版)